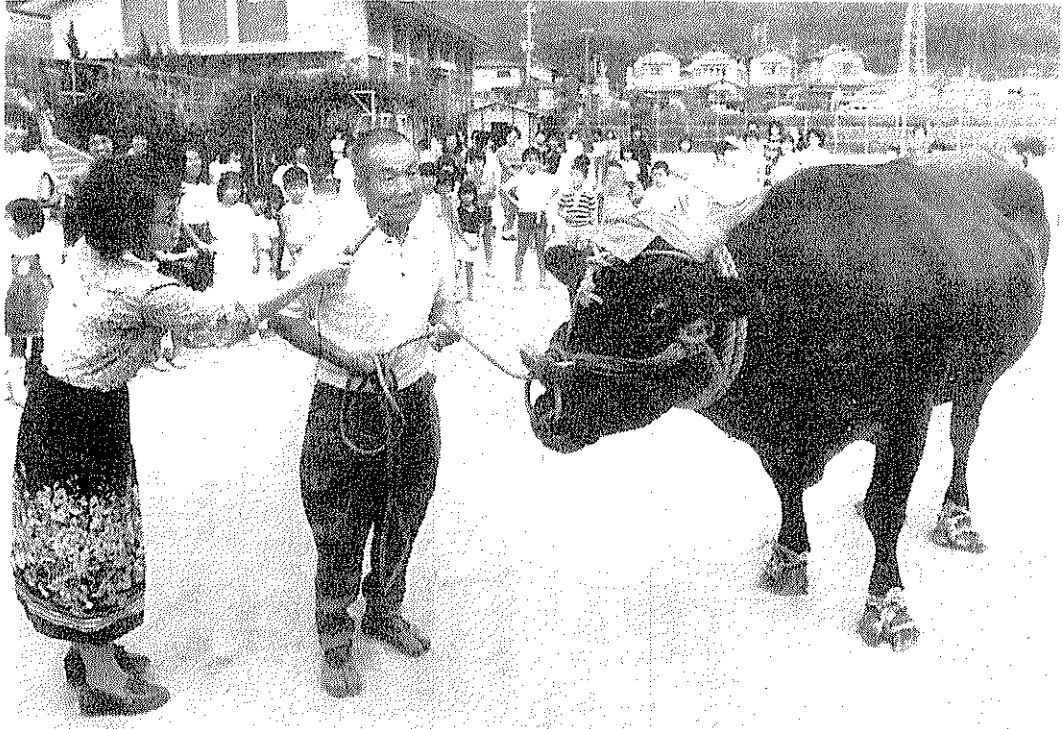


野高上

№12

編集発行
京都市市上高野
小学校育友会
広報委員会
S. 56. 10. 9



宮野さんと黒牛



子どもの特質と 教育の留意点	林 信一	2
活動の報告	安井 敬爾	2
スポーツ雑感	川名 卓夫	3
明日への健康	富井 章	3
教室だより		4
「先生」とよばれて	五十嵐政子	8
育友会組織表		8
京都で江戸を撮る		9
ロケ地ベストテン	南野 梅雄	9
雷のはなし	前川絃一郎	12
知っているようで 知らないこと	広報委員	13
子どもの好きな給食 ベストテン	井上 明美	14
京の裏道	松本 章男	14
かぞえ歌		18
あとかき		19

子どもの特質と

教育の留意点

学校長 林 信一

今日の子どもの特質を知るためには、現代の世相が子どもの生活態度に反映している諸問題が、その回答を示している。その主たる特質的傾向は①無気力②持久力の欠乏③生活の目当てがない④基本的行動様式の欠如などがあげられ、更に現象的には①非行の増加と低年令化②家出、自殺③おちこぼれなどの傾向が見られる。その対策の核心となるものは「教育課程の基準の改善」における三本の柱のねらいである。それがまた教育の留意点でもある。以下私なりの具体的事項を一、二述べることにする。

一、互いによいところを認めあえる人間性の育成

「自信喪失」「無気力」などの是正には、その子どもの長所を強調することにより、その人格の弱点を克服させ、自信回復に役立つと言われる。更に仲間もそれを認め、互に長所を認めあえる人間性の集団（学級）ができるとすれば、「仲間意識の乏しさ」や「無気力」は矯正され、自信の意欲に満ちた人間性が生

まれる。

二、互いにめいわくをかけない人間性の育成
他人に迷惑をかけないことは、諸々のきまりや約束ごとを守ることであり、同時に他人を尊重することであり、また、豊かな人間性へ近づくことにもなる。「情緒の不安定」「甘え」「基本的行動様式の欠如」などの是正にも役立ち、常に自分と対決し、反省し、他人を意識することになる。そのことは、集団意識や集団活動への基本的態度の育成にもつながる。

教育の留意点に共通理解し、教職員のすべてが、多方面から多角的に観察して指導できる学校づくりをめざして努力していきたいと願っている。

活動の報告

育友会会長 安井 俊 爾

夏休みも終り、本年度も半分が過ぎようとしております。一学期は四、五月と病気の為に、活動が出来ず役員の皆様に大変御迷惑をおかけしました。この紙面をかりましてお詫び致します。

長い夏休みも子ども達には事故もなく、全

員元気に二学期をむかえられましたことは、会員の不断の活動が実を結んだものと喜んでおります。上高野の育友会も年を追うごとに成長をとげ、今年も盛りだくさんの計画が、一つ一つ実行されております。特に今年から「ママさんコーラス」には、四年生のお母様方から各クラス十五名づつの参加をいただき、ようやく本校のコーラスも、コーラスらしくなりました。御参加下さいましたお母様方には、厚く御礼申し上げます。

又、十一月には、「不用品交換会」を予定しております。本年度の予算は会員の増加も無く諸物価の値上げもありまして、逼迫した状態にあります。会員の皆様には、活動費捻出の為に御協力をお願いしなくてはなりません。安易な会費値上げができない現状に、おきましては、こういった催しを行いまして、資金の補充をしなくては途中で活動の停止ということになります。例年通りの活動レベルを保つうえにも、今回の「交換会」は是非とも成功させねばなりません。重ねて会員各位の御支援を、お願いする次第です。

さて、八月二十七日に、全国のPTA大会が、和歌山市で、開かれまして参加致しまし

感染、過労などの生理的なものさらに精神的、心理的なストレスとして各種の不安、恐れ、緊張、不満、失望、敵意など多くのものがあります。

さて我々、親として、子供としての日常の中で、不快と感じるものがどれだけあるでしょうか。成人病の大半はストレス病だといわれ、高血圧症、狭心症、胃、十二指腸潰瘍、過敏性大腸、糖尿病などがその代表です。

つまり人間が身体と心のアンバランスから健康をそこね病気になる、また心身のバランスの回復によって病氣から立ちなおるといふ傾向が強まっているようです。子供達にとっても不快に思うことが毎日多すぎるようです。ことに、精神的・心理的な不快感を、まず家庭内から、学校、地域、そして社会の環境から少なくしてやり、身心共に健康な子供の育成を考え、皆が健康でありたいものです。



教室だより

一年生の夏休み

一の一 赤水 初子
一の二 岩崎 佐世子

「せんせい、おげんきですか。ぼくはまっくろになりました。だけどおしりはまっしろです。だいぶおよげようになりました。」

一年生にとって初めての夏休み、学校から40日はなれるので、おたよりを交換することになりました。八月も十日すぎた頃からは、毎日のようにお便りが届きます。

「あさがおがきようは5つさきました。まいにち水をやっています。」

「せんせい、ぼくほうみにいってとまってきたよ。およいでおもしろかったよ。みずがからかったよ。かいがらを一つだけひろったよ。」

「せんせい、おげんきですか。きのうやせのプールにいきました。3めーとるおよげました。かおもつけられました。」
ひとりひとりのお便りを読みながら夏休みってすばらしいなと思いました。自分で種を

まいて、一生けんめい水をやって世話をしている朝顔を、起きてすぐ見にいって「わあーきれいな」と歓声をあげたのでしよう。水泳でがんばってできるようになった喜びは、この子が一番よくわかります。一度やれる喜びを知ったら、自発的にやるようになり、次の段階のやろうとする力になっていくのです。

このように、子どもの心をゆり動かしていく営みをすすめていくのは、家庭の中にその子のペースに合わせて息ながく、じつくりととり組む場があるのです。一学期のおわりに、どのような夏休みをすごせたかをお母さんに書いて頂くようお願いしましたところ、とてもたくさんのお母さんが書いてくださいました、有難うございました。各々のお母さんが子どもといっしょに真剣にとり組み、すばらしい一年生の思い出を作られたことが胸に伝わってきました。これからもお母さんといっしょに、今後の成長を見守っていきたいと思っています。

二期期になって、子どもたちは、一まわりも二まわりも大きくなったように感じます。運動会の練習も暑さに負けず頑張っています。当日は、二年生といっしょに堂々と行進する一年生をはめてあげてください。

水が大好きになった

Kちゃん

二の一 斉藤 君子

二の二 藤田 明美

(佐 堀 弘 一)

長い40日間の夏休みを終えた子ども達は、日によく焼け、うんとたくましく成長しました。学校生活では味わえない、さまざまな体験の中で未知の世界を知った喜び、たくさんの人達との出会い、今まで出来なかつた事が出来るようになった喜び、その中で子ども達は成長するんですね。

水を怖がっていたKちゃんが、一学期の終わる頃やっと水の中にもぐれるようになった。もう少し学校があると、浮身が教えられるのに……一年の時は、お友達がどんなに誘っても、わたしが手を持ってても体をかたくして水に反抗していたのに。二年生になって、「自分も泳ぎたい」という要求が湧いてきたのです。「一、二、三、四……」と七つ数える間水にもぐれるようになった。プールの底から足を離すと、体は自然と浮いてくる。ここに顔を水泳の時間を待つようになった。

「Kちゃん、絶対泳げるようになるし、友

達を誘ってプールへおいでね。」

夏休みに入ってKちゃんは、毎日毎日プールにやってきた。二十八日には浮身が出来るようになった。手を前にのぼし、足も後ろのぼしてぽっかり浮かんだ、口数の少ない女の子だが生き生きした表情で

「泳ぎが好きになった。」
と嬉しそうでした。夏休みにプールに来なかつた日は二日だけ、彼女はせつせと泳ぎに挑戦した。喜々として。

九月始まってKちゃんは、ずっと前から水と仲良しという顔で、足をバタバタさせて前へどんどん進み、あれよ、あれよと思う間に9m進んだ。よく泳ぐ人から見れば、たつたの9mということになるかも知れないけれど、9m泳げたことで自分もやれば出来るという自信になった。

授業中の態度にも集中力が出来、自分からやる気を出し始めている。

子どもが、自分からやる気を出して成長していく姿を見ているのは、本当に嬉しいものです。



コンピュータ雑感

三の一 小森 邦子

三の二 宮坂 昭

先日、産業ロボットに関する記事を新聞で見た。読者の目を引くため「視力を持つロボット」との見出しであった。これは、人間がロボットの手足を動かして、ある作業をコンピュータに記憶させるとその作業を何回もくり返す。従来のプレイバック・ロボットに、感覚や識別機能を持たせたもので、七〇社にのぼるロボット・メーカーを有するわが国の現状においては目新しくはないにしろ、私は、新聞やテレビに、この種のニュースが茶飯事にあつかわれ出したことに関心が向く。

※

※

四条・寺町の電化店をのぞくと、プログラム教本を片手に、背中をまるめて、マイコン(マイクロ・コンピュータの略)のキーボードに手と目を走らせる小中学生がいる。インペーダーに飽き、テレビゲームに満足できず、自分でゲーム内容を考案改善できるマイコンゲームにとりつかれた「マイコン族」なのだ。因みに、この夏休み、私の通った「マイコン教室」では、各年代から二〇人ほどでグル

ープを組んだが、とびぬけてキーさばきがうまかったのは、実に小学校三年の少年だった。マイコンの持つ「草の根」性——年代・資格を問わない。従来技術・権威が通らない。

——がいわゆるゆえんであろう。

＊ ＊

三年の少年に速さでの勝ち目はないので、マイコンの活用・教育現場篇？へ目を向けると、すでにC A I（マイコンと児童・生徒がある言語で質疑応答して、その子に合った進度で学習をする）は、アメリカの小中学校では非常に盛んで、日本でも筑波大付属小学校で、この実験が進められているという。

このつぎ、原稿を頼まれるころ、産業（知能）ロボットが、マイコン族が、そして、C A Iがどんなに変わっているか、今から気にかかる。

みこしだ、ワッショイ

四の一 五十嵐 政子
四の二 北村 裕二
四の三 片岡 佳子

第一学期も最後の日、七月二〇日に四年の学年懇親会を行いました。親も子も、また

教師も一丸となって何かをつくり出そうというねらいで、「みこしづくり」を計画しました。各クラス二基、計六基のみこしの作成です。

区内の方から竹を頂き、まずはお母さん方で骨組みづくり。子ども達は、材料として持ってきた空き箱などを前に、あれやこれやと構想を練ります。いよいよ作業開始。子ども達の大活躍と思いきや、活発なのはむしろお母さん方。にぎやかな声の中で、作業が進みます。子ども達は、その勢いに押されきみで「お母さんやらばっかしやって、やらしてもえへん。」というような声も聞かれる程でした。

しだいに出来上がっていくみこしに、お母さん方も子ども達も興奮気味。子ども達は、かつぎたくてしかたありません。そして、いよいよ完成。紙袋などで作ったはっぴを着て、練り歩きます。区内をひとまわりしましたが、やはりはずかしいのか、最初は声も、きわめて控え目。それでも、だんだん大きな声が出るようになり、みこしも楽しそうに揺れます。「三宅の駅まで行こう。」「もっと、人のぎょうさんいやはるとこへ行こ。」と、だんだん元気が出てきたのですが、それは、交通事



情からあきらめてもらい、仕上げは、運動場でのみこしレース。それこそ、お母さん方も子ども達も、必死で走ったという印象でした。

ソーラン節のおどりを最後にこの日を終わりましたが、楽しい中に大きなエネルギーを感じる一日でもありました。この力を、第二学期、第三学期と、これからの生活に是非いかしてもらいたいものです。

子どもとお金

五の一 梅本昭己

五の二 東雄

(井上隆介)

三宅八幡境内、行く人も来る人も幼児から少年少女、否成人まで、暇なく口を動かし乍ら……

どこのお店も又人ばかり、ここで使われるお金(小づかい)は、どういう経過で子供達の手へ渡ったのだろうか、ふと思った。

ふだん、小づかいを与える方がよいか、与えない方がよいか、よく議論の出るところである。

A、小づかいを与えない方がよい

○ むだ使いのくせがつく。

○ 不良化のもとになる。

○ 買いい食いなど不衛生である。

B、小づかいは与えた方がよい

○ 友達を買うのを見ているだけでは可愛想である。

○ 家の金を持ち出すような事になる。

○ 計画性を育てる事が出来る。

などなど……

どちらの考え方も一理あると思われるが、

要するに、子供の性格、周囲の環境、発達の段階により、方法が違ってくると考えられるが、何れにしても、そこには納得のいく対話と指導が必要であろう。

お祭りに限れば、子供達にとっては、臨時給のようなものである。

その臨時給を与える時にも、きちんとした対話が必要であるのか、ふと気になる。

きちんとした躰がなされ、築きあげられようとしているすばらしいものが、このような機会にくずされる原因になるのではないかと、一抹の不安を感じた。

「夕方のバスの中で」

六の一 追田寛子

六の二 萩原俊作

先日、ある用事で夕方のバスに乗りました。

あるバス停から小さい子供達がどつと乗り込んで来ました。その中の一人はカンジュースを飲みながら……。別の一人はお菓子の大きい袋をかかえて食べながら……。

バスの中は、夕方のラッシュ時でかなり混んでいました。ジュースを持って乗った彼女は片手でジュースを持ち、片手で袋の中のお

金をさがしているのです。バスがゆれるたびに、ジュースもたつぷとぶとゆれている事でしょう。一たびバスが急停車でもしようものなら、ジュースは周りに飛び散るんじゃないか。と考えたのか、人々は、ジュースを持った子供の周りから離れていました。

又、お菓子の彼は、バスの前の方に陣取りお菓子にパクついていました。友人の女の子と菓子の取り合いを始め、満員の乗客の中のバスの後ろの方に追いかけてきました。袋の口は大きく開き、片方の手で菓子を口にほうりこみながら……。

この二人は、おけいこ事が終わってから買って食べたのでしょうか。

けいこ事ばやりのこの頃、前出の二人のようなことは特別な事ではなくよく見かけることです。バスの中で二人を見ながら、次のような事が頭をかすめました。

「満員のバスの中で飲んだり食べたりの行儀の悪さ。エチケットを知らないなあ。夕食前にこんなに飲んだり食べたりにして、夕食が食べれるんやろか。

おけいこ事の帰りに買いぐいをする金を親が与えているんだろうな。

お金の正しい使い方が教えてないなあ。

親は子供のために思っけていこと事に出してはるのやろけど、親の思い通りにならんなあ。かえって悪いくせを覚えたんとちがうやろか。」等。

夕方、五時頃ゲームのある店先にたむろして、ギャンブルに夢中になっている我が校區の子供達を見て、寒々とした思いを抱くのは、私一人でしょうか。

「先生」とよばれて

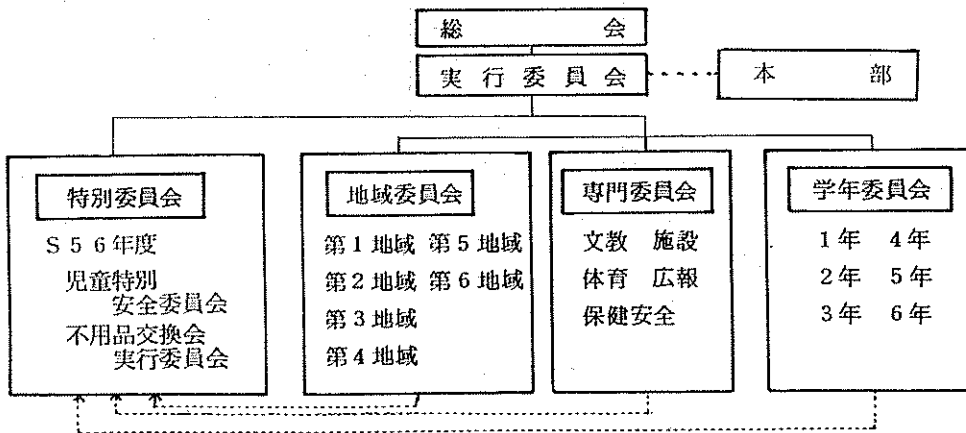
五十嵐 政子

早いもので、「先生」と呼ばれてから、六カ月の日々が流れざりました。考えて見れば、その毎日が失敗の連続だったような気がします。失敗を失敗として気づかないこともたくさんあるでしょうし……。全く頼りないものです。

しかし、そんな私を通して、そして、クラスの間との関係を通して、日々、成長していく子供たちを見てみると、この子たちといっしょに成長していきなあと素直に思っています。時には、がっかりさせられることがあることも、勿論、否定はしませんが……。結局、私は子供たちに飛びこされていく存



在であり、またそうでなくてはならないと思えます。ただいくつもの偶然が重なり合っ出て逢うことのできた子供たちにとって飛びこえる価値のある人間として、いつも子供たちの前に立てるよう、先輩たちの助言、保護者の方たちの意見などを大切にして、これから努力していきたいと思えます。



「京都で江戸を撮る」

ロケ地ベストテン

南野 梅 雄

石ならぬ、テレビのチャンネルをひねるとマゲモノドラマにいきあたる当節です。

時代劇をやるなら「京都で」と、この世界にとびこんだ私には、時代劇が盛んな今の状態は、嬉しいことには違いありません。が、制作本数はともかく、その中味の方はどうかといえますと、類型化したストーリー、タタタと人を殺めるだけの侍、安直な結末等残念ながら大いに疑問があるところで、今日は時代劇論をおつのが目的でもないで、一つ肩のこらない裏話でもしてみようと思います。

「時代劇」と一口にいつても、実に曖昧なとらえ方で、いつたどの時代を指して時代劇というのかと思われるかもわかりませんが、我々がいうところの時代劇とは江戸時代を背景にしているドラマをそう呼んでいて、江戸以前、桃山とか室町時代ももちろん時代劇と

いつていいわけですが、安土桃山から鎌倉時代にかけては、便宜上、それを「戦国もの」或は「鎧もの」といい平安時代になると「王朝もの」などと呼称しているわけです。

ところでテレビ映画の時代劇はその殆んどが恐らく八割は京都製でしょう。なぜ、時代劇ものといえば京都なのか、それはもうよく知られているように、明治以前に出来上った歴史建造物が、日本で最もたくさん現存している地、車で10分も走れば大自然の真只中に達することが出来る地の利、そんな二大環境に恵まれているからに他ならないでしょう。私などは、そんな古都千年の文化財と自然にくらいいつている小判鮫みたいなものかもわかりません。

さて、映画では撮影場所を大別すると二つに分かれます。屋内撮影と屋外撮影で前者をセット、後者をロケと簡単にいつています。もう少し細かくいえば、セットとロケの間にもう一つあって、それをオーブンセット撮影といえます。西部劇などでは必ずでてくる町酒場、銀行、店などが立並ぶ通り、家屋などを特別に屋外に建造したセット、それをオーブンといっています。それでこの稿はロケに限って、それも最もよく使われる場所京都の

方なら「あ、あこかいナ」とよく御存知の、まあいつてみればロケ地ベストテンみたいなものを記してみようかと思えます。

決められた予算と日数内で仕上げるといことは何でもそうでしょうが映画づくりの場合特に重要で、したがって例えば九州まで行けば台本のイメージ通りの素晴らしい撮影場所、ロケ地があると判ついても限られた予算と制約の中では到底九州まではいつておれなくて、イメージ通りの土地を求めて撮影行ができるのは製作費数億円以上の大作ぐらいです。先ず、理想の地をあきらめて代替地を探し求めることになるわけです。

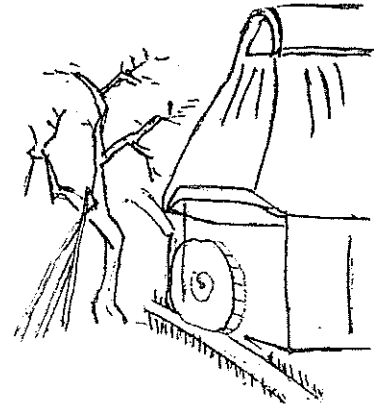
撮影所から近いこと（大体において日帰りができて、しかもその時間内で予定通りの内容を振り終えることが可能なこと）

近くでもロケ費（主なる費用はロケ先への謝礼金）が予算の枠よりオーバーするような不可（今や謝礼金不要といつた場所は殆んどなく、中には一時間の使用料が数万円といつたロケ地もあります）、更にいくら劇内容に合う場所があつても「うちはお貸しできません」といわれば、それは勿論、不可／＼（例えば重要文化財とか「御所」などの宮内庁関係のものは先づ不許可になります）。

ところで時代劇にひんばんに出てくる場所としては武家屋敷とその周辺、神社仏閣の境内、旅から旅への街道、その道中にある川、渡し場、山中、橋をしてお城などでしょうか。その他に江戸の市中、長屋などがあるのですがこれらは日本中どこを探してもあるわけではないので、そこでこれは先にいいましたオーブンセットに頼ることになるわけです。

では近くにこんな場面がとれる場所があるのか。ドンピシヤかどうか知りませんが、それがうまくしたものであるのです。"オイオイ俺はな、江戸をこの眼で見えたばっかりだ、こんなベラ棒な嘘っ八の江戸なんぞあるものか"という人は幸いにも一九八十年代には現存していないという絶対の切札(?)を我々は握っているので京都で江戸が撮れる次第なのです。摩訶不思議な江戸だとは思いつつ……

京都製江戸の第一位は嵯峨野一帯でしょう。何といっても撮影所から近い、これが有難いことです。なにしろ朝からの雨が午後にはやんでも"さあ、いけるぞ"と急きよでかけていってロケが出来る位、近いのですから。それにここら辺りには武家屋敷があり(むろん本物の武家屋敷ではありません。寺院の立派な



門と扉をそう見立てるわけです)、不忍の池があり(むろん上野のシノバズのイケもどきの池を写すことになりました)、東海道があり(富士ならぬ愛宕山が見える東海道です)、八丈送りの罪人を見送る霊岸島があり(池の手前に柵を立て、沖を海に見立てる)、売られていく娘との悲しい別離の渡し場があり(やはり池に棧橋をつくり舟を浮べるだけ)、木馬道きばみちのある峻しい山中があり(これは正真正銘の山道があります)、恋人たちが語らう夕日の沈む品川の海辺があり(広沢の池を薄暮に撮るとまさに一幅の絵です)辰己芸者の嬌声が聞える舟宿の舟着場があり、……時代劇には欠かせない、ここら辺りは宝庫です。嵯峨野一帯のそれらは大覚寺であり、大沢の池、連なる田園地帯、それに接する広沢の池

などがその主役です。

こんなところですから晴れた日などこの近くを歩いてみますとどこかで一度位は必ずロケに出合うでしょう。それに人家からこんな近いところなのにこの春には眼の前を美しいキジがスタスタと歩き回っているのに会いましたし、三年程前には五月五日の子供の日に蟬の声を耳にしこれにはビックリしました。そんな思わぬ自然の恵みに浴する喜びもロケにはあります。更に近いといえば嵐山、ここは京都観光のメツカみたいところですからどこを見ても人、人、人で時代劇など撮れそうもないのですが、ここには貴重な橋があるので見逃すことができません。この渡月橋支流にかかる太鼓橋(と我々は呼んでいます)が正式な名称かどうか)が目指すターゲットです。橋。こればかりはどうふんばっても鉄やコンクリートのを撮るわけにはいきません。全くわらぶき屋根の農家と土橋、木橋はまるで失くなってしまいました。嵐山の橋も鉄筋コンクリート製ですが幸い観光地の橋だけあってどことなく表面は木橋風になっているおかげで充分江戸時代の橋に見立てることが出来ます。ただし、この欠点?は先にもいいましたようになんせ人が多い、と

でも真つ昼間キヤメラを向けることなどできません。そこで撮影は人が現われない早朝か車も減る深夜に限られてくるわけです。しんどい所です。ここは。

橋といえばもう一つ忘れることのできない名物橋があります。国道一号线の木津川にかかる御幸橋の少し上流にある俗に我々が「流れ橋」と呼ぶ長さ二百メートルは優にある素晴らしい木の橋です。全く、京都近郊にこんな木の橋がかかっていること自体、私には奇蹟のように思えます。「流れ橋」などという縁起でもない名で呼ぶのは奇妙なことですが何しろ木の橋、大水がでると一部流失してしまふからなのです。そしてその都度なぜかコンクリートにはならなくて元のままの木の橋に復元されるという次第、素晴らしいことです。この姿のまま、いつまでも健在であることを願わずにはいられません。

ベストテンに必ず入るロケ地としては同志社大学の北にある相国寺があります。本堂の長廊下、枯山水の庭は江戸城に模してよく使わしていただき、塔頭が多くある外周は先の大覚寺同様武家屋敷街として見逃せないロケ地です。江戸市中の場面としてよく出てくるのは神社仏閣です。これはさすがに京都です。

選ぶのに苦勞する位ですが筆頭は北区にある今宮神社でしょうか。祭礼や繁華な場面には絶好で特に「本家」と「元祖」というキヤッチフレーズで競い合っておられるあぶり餅屋さんをはさんで神社の裏門を見るアングルは殆んど手を加えないでもそのまま撮れば「はい、これが江戸時代でございます」といえる位得難い場所です。これまた「流れ橋」同様どうかこのまゝいつまでも「本家」「元祖」で張り合っていていただきたいと願う次第です。

麹町にも狸がいたといわれる江戸のことです。寂しい江戸の場面なら素晴らしい原生林の森、下鴨神社の森を忘れることができません。登城の乗物を襲う覆面の武士団そんな場面にこれほどピッタリする場面は一寸見当りません。

あと、屋敷町としてよく使うロケ地は黒谷。見事な山門から広い石段、石畳の道、広大な墓地、ずいぶん撮り手のあるベストテンに当然入る場所です。

次は街道や川の渡し場などのロケ地として一寸遠くなりますが亀岡に敵うところはありません。「座頭市」「木枯し紋次郎」などでは随分とこのお世話になりました。この

二作の主人公は二人共アウトロー、將軍様のお膝元の江戸や東海道といったメインストリートから顔をそむけて生きている流れ者です。必然的に歩く道も木の葉が舞い、寒風吹き荒む裏街道が主舞台となります。

何度通いましたか。こうなると土地の人よりひよっとしたら詳しくなっているかもわかりません。あの峠道をたどればどこそこへ出る、そこには画になる大きな木があったな、といったようなものです。この亀岡には他に聖武天皇建立の国分寺、惚れ惚れ見とれてしまふような油土塀がある昆沙門町。渡し場には保津川がいい安配です。保津川といえ山陰線の保津峡駅下流、清滝川と合流する地点もなんとよく時代劇にはでてくる名所でしょう。激流が岩に突き当たって大きく曲がり一瞬間を巻いて淀む深淵。それを絶壁から見下ろせる立地の妙味。昼の弁当がとつてもうまい所です。こうして拾いあげていくと切りがありませんが建仁寺、高雄の神護寺、中川の菩提の滝、花背の別所村、坂本の西教寺、琵琶湖、彦根城、日本海の間人などはよく行くところではあります。他に開かずの宝庫、京都御所、妙心寺、西本願寺、二条城など京都にはよだれの出そうな場所が数多くあります。一部でも

撮影が許されたら作品の奥行きがぐつと深まるでしょうに、実に残念です。日一日とロケ地の環境汚染が進み、道は舗装され、ガードレールで囲われ、住宅が建ち、奥地へ追いつまれる野性動物と同じように我々のロケ地もどんどん奥へ追いやられていきます。それでも探せば尽きることなく時代劇をとれる場所は見えてくるものです。何気なく入った道の奥に、そんな宝物を見つけた時の喜びは知る人ぞ知ります。今日も字で書かれた想像の場所を具体的なイメージに置きかえる作業、ロケハンに何組ものグループが京都のあちこちを飛び回っていることでしょう。

“あゝ、あの電柱がなかったらなあ”

“あかん、ここはロケに使わしてくれへん”

“ええとこやけど、一寸遠過ぎるなあ”

―了―



雷のはなし

前川 紘一郎

地震（じしん）・雷（かみなり）・火事・おやじといつて、昔から、おそろしいものの一つになっている雷ですが、雷をこわいと思うのは、あのすごいごう音のためでしょう。でも、本当にこわいのは、ゴロゴロという音の前にピカッと光る稲妻（いなづま）の方です。これは雷放電（かみなりほうでん）といって、空気中を電気がものすごいいきおいで流れているのです。この電気が少しでも人の体に流れると、「感電」を起こし危険なので、雷が鳴り始めると、みんな建物の中などへ逃げこみます。

雷が遠くにあるときには、光ってから五秒〜十秒ぐらい時間がたってから、ゴロゴロという音が聞えてきます。近いときには、ピカッと光ったかと思うとすぐあとにゴロゴロという音が続きます。光ったあとと音が聞こえてくるまでの時間を（時計を使って）はかり、雷までの距離（きより）を知ることができます。（時間秒×三四〇）で、その距離（メートル）が求められる。雲の中で放電が起きると、光と音が同時に発生するが、光は一瞬（いっし

ゅん）のうちに伝わり、音の方はゆっくり（三四〇メートル/秒）伝わる。この時間が一秒より短いことがあります。ということは、雷の放電が三四〇メートル以内で起きているので、大へん近くにあり危険です。

雲の中で作られた電気がたくさんたまってくると、雲から雲へ、あるいは雲から地面へ向かって一度にたくさん電気が流れ、それが放電の火花（稲妻）となって見えます。そして、雷は電気の流れやすい道を見つけて、電気を地面へ流す。一番雷の落ちやすいのは、建物の上にある避雷針（ひらいしん）などの金属。そのほか電柱や建物、木など背の高い物によく落ちます。

一、登山のときには、高い所にいるので、その分、雷の近くにいることになるので注意が必要です。わが国でも、登山中の生徒が雷に打たれ、おおせいなくなったことがあります。

二、運動場や野原にいるときも、早い目に大きい建物や岩かげなどに入るのが賢明です。（自動車内部は安全な方です）雷が去ったあと、（遠くでゴロゴロと鳴っているようなとき）でも、まだ近くに雷が落ちることがよくあるので、運動場など広い場所へ出るのはさけるべきです。

三、避雷針のない普通の家や建物の近くに雷が落ちると、雷の電気が電燈線や家の壁を伝わって地面へ流れてゆくので、その通り道から離（はな）れている方が安全です。壁にもたれたり、電燈の下に居るのはよくありません。また、水を使う所（台所やふる場）では、それだけ電気が流れやすいので、遠ざかっている方が安心です。

結局、部屋のすみの方で、電燈も消し（家の電源を切っておくのが一番ですが）、文字通り小さくなって、窓の外の雷の活動をながめているのが最もよさそうです。

避雷針は、本当は、そこへ雷を落ちやすくするためのものです。（雷が落ちても、電気がたやすく地面へ流れるように太い銅線が地面まで伸びています）雷が避雷針に落ちることがなくても、実は、目には見えない音も出ない小さな放電が、絶えず、雷雲（かみなりぐも）と避雷針の間で起きており、雷の電気が少しずつ地面へ逃げているのです。逃げる電気が少しずつでも、だんだん増えてゆけば、雷の活動を弱めることができます。このように、少しずつ雷の活動を弱めながら、一方では、落雷（らくらい）によって雷の電気を地面に容易に流すというのが避雷針の役目です。

知っているようで

知らないこと

広 報 委 員

上高野から八瀬へ行く街道ぞいの宮野さん宅に、それは立派な黒牛がいます。牛の大好きなおじさんから聞いたことを書いてみました。

牛と馬はなんとなく似ていますが、牛の前上歯は生まれた時からないのを知り御存知ですか。実はね、舌で草を巻いて下歯で切るので、馬は上、下共大きな歯がありますね。年令を数えるのは牛の奥歯の減り具合で大体わかるそうですが、馬は歯が年と共に伸びてくるのでその大きさと見るのだからです。生まれたての牛の赤ちゃんには、下乳門歯が八本生えていてまず両側二本ずつ抜けて生えかわるのがつまり二才、二年目です。

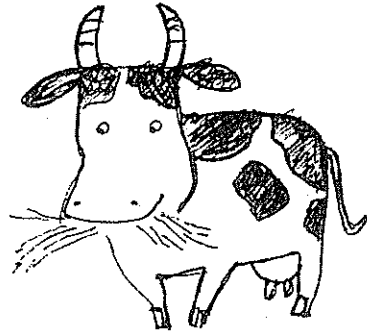
牛には胃が四ツあってはんすうすることは御存知のことと思います。でも、どんな形で食べたものが口に戻ってくるのか想像できませんか。食事は一日二回、小麦粉のかす約三キロ、庄ペン麦約五キロをドロドロに煮たのと、三センチ程に切ったワラを六〜七束、これを

大きなバケツのような入れものに入れて食べさせます。牛はまず口から胃へどんどん放り込みます。牛が働いている内ははんすうをしません、一服した時、消化の悪いワラがおにぎり大の大きさになって口の方へコロツと戻ります。それを元気な時なら三十八〜四十回くらい噛みますが、体が疲れてくると二十〜三十回くらいで飲み込みます。牛を飼っている人は、この噛み具合で体調がわかるそうです。こなれたワラは二番目から三番目の胃へといくわけです。

宮野さんの牛は働きの牛です。山で切った木材を運びます。坂道を下る時、または細い道を曲る時、加速のついた材木が引張っている牛の足に突進しないように、牛自身がかげんしながら運びます。そしておじさんのかけ声一ツで止ったり、動いたり聞きわけるので、ところどころ馬は皮膚から汗を出しますが牛は犬と同様舌から汗を出します。だから夏の炎天下はにが手です。蹄も馬は中指一本で立っているから固いので蹄鉄を打ちますが、牛は中指と薬指で立つので爪と爪の間に石が入らないように働きの牛には薬ゾウリをはかせたりします。

このことにより分類学的に馬は奇蹄類、牛

は偶蹄類ということになります。偶蹄類にはヤギ、カモシカ、ブタも仲間ですが例外としてブタは、はんすうしません。



子どもの好きな給食

ベストテン

栄養職員 井上明美

嗜好調査的なものは、昭和五十六年度行っておりませんが、残菜量などから想定しますと次の10献立を掲げられるかと思えます。

- カレー
- スパゲティ（ミートソース煮、イタリアン）
- ハンバーグ
- 焼きそば
- ミートボール

- えびコロッケ
- 冷しビーフン

- カツ（鶏肉、豚肉、鯨肉）

- マカロニサラダ

- クリーム煮、シチュー

その他、プリン、ヨーグルトに人気があるようです。これらの献立は他の学校でも同様に人気があるようです。また、本校での残菜の多い献立は、野菜サラダ、ごまあえ、煮つけなどです。これは他校と異なった傾向の一つです。

今後は具体的な数値が得られるように、本校でも一度嗜好調査（給食アンケートなど）を行ってみたいと思っています。

京の裏道

松本章 男

北白川仕伏町のバス停前の一筋西を北へ折れると、バプテスト病院の正門脇から瓜生山へ分け入る地道がある。道のかたわらに古い燈籠や庭石が並べられているのは石材商の資材置場になっているからで、そこを過ぎると間もなく、左手の山かげに大山祇神社があらわれる。バスのかよう表通りを一足逸れ、忘れもの数分で、人の詣でる気配もない、忘れ

去られた社に出くわすというのは京都ならではのことだ。

牛頭天王が八坂の社へ祀られるに先立って播磨国から北白川東光寺へ勧請されたというその故地をこのあたりに定め、瓜生山はいわれのふかい山だというので、山の神を祀ったものらしい。

社をあとに、せせらぎをこちらへ跨ぎあちらへ跨ぎして、狭い沢道を瓜生山へ登っていく。細く清い流れの底には白い砂粒がきらめいている。

冒頭から話が逸れるけれども、このあたりの山峽は上層の砂土をはがすとその下は白色の花崗岩層である。谷水とともに流れ出た白砂が覆った土地が古く「白川」とよばれていかに広大な地城を指していたかは洛東篇で触れたところだ。今日では東へ尾根ひとつへだてた峽谷で採掘されている、この白川砂が庭に用いられるようになったのは、平安京が造営されたはじめ、禁庭に敷かれたのが濫觴である。身分高き者の来過通行に、足下を清めるため、平地上にかならずこの砂が敷かれた。古社寺を訪れると、玉垣や勅使門の脇などに円錐形の盛砂がつくられているのは、高貴の来駕にそなえた名残である。この盛砂を今日

では神の「よりしろ」として説明している社があるけれども、ほんらいは勅使などの奉幣があるごとに道に敷かれたのであった。御願寺や定額寺では、律令時代には宸殿や本堂の庭に同じ目的で堆く盛られていた白砂が、武家の天下となつて寺のほんらいの役割が薄れると、手間を省いて敷きっぱなしにされていた。石塊との組合せで京都の寺の庭にみられる白川砂による造園は、この清めの砂に淵源をもとめるのがおもしろい。

沢をつめ、左の山腹を登る道へとりかかる。行くこと暫し、苔むした礎石がそこそこ転がる山中を道は縫っている。蔓草のからまる木々の枝をかきわけてあたりへ踏みこんでみると、皆の一郭かとおぼしい石組が見分けられ、ここは室町末期の乱世に衰れをとどめた足利將軍の山城の跡なのだ。

この山に最初に皆を築いたのは、細川政元に擁立されて先の將軍義隆と争った十一代將軍義澄だったといわれている。次の將軍義晴もこの城に拠つて入京の機を窺つたが、三好長慶に攻められて近江へ走らねばならなかった。十三代將軍義輝もまたこの城にとり憑つたことがある。戦乱の都に宿を失い、いづれも幕府の実権を奪いあう部将たちの傀儡にし

かすぎなかつたこれら室町末期の將軍たちは、隙が生じるとこの瓜生山へ現われて都を瞰下し、柳營に帰る見果てぬ夢を追おうとした。しかし、都を制圧している部将から威しの閑の声をかけられると、彼らは物音に驚く鼠のように慌てふためいて遙かの僻地へ落ちていったのである。足利氏が亡ぶと、瓜生山の城は、崩れた石組の散乱する廃墟と化してしまつた。

ところで、文献をたずねると、この瓜生山は白川山とも勝軍地蔵山ともよばれている。歴史の槍舞台には登場しないけれども、京都では、王朝このかた禁裏の警護に武者を送つてきた土着の郷士の家柄が幾つか知られていて、その一つに渡辺氏という家系がある。今日の一乗寺はその渡辺氏が拓いた里といつてよいだろう。

武家の時代になると、この王城の地の実質の支配者は次から次へ交代していったけれども、土着の郷士たちはつねに古き統治者を扶け、外からやつてきた新しい覇者に果敢な抵抗を試みてきた。

比較的近い例では、信長が入京してくると、一乗寺の渡辺氏は、東の山中の磯谷氏、北の静原の山本氏と語り、それぞれ皆に籠もつて

帰順を示さなかつた。山本氏の拠る静原山の皆を攻めるのに、信長は明智光秀をさしむけねばならなかつたほどだ。渡辺氏は大坂の陣でも旧勢力の豊臣方を扶けて、一乗寺の里そのものが徳川方から監視される羽目に陥っている。

洛北の山里が時の権力者と相容れない人たちの隠栖地として好まれてきたことを指摘した人があるけれども、渡辺氏の拠つた一乗寺のように、洛北の地はいずれも、新しい権力に冷やかな目をむける、したがって反抗者や失脚者をつねに温かくうけいれる土地柄だつたのである。

武士を廃業して隠栖の適地をもとめていた丈山も、この土地柄に感ずるところがあつたのだろう。五十九歳で一乗寺の里に詩仙堂を建てて移り住んだ丈山は、鴨川をも渡らず、と晩年は心に誓つて京師との交りさえ断つた、まことに隠者らしい生活だつた。

家康の近習として青年時代を過ごした丈山が、大阪夏の陣では率先挺身して敵三名を斬りながら、それが禁令を犯した先駆けの功だつたかどで、かえつて主から贅居を申し渡されたことはよく知られている。家康から蒙つたこの勘気が丈山その後の処世観に影響し

たことは想像に難くないが、仕官の誘いを固辞しつづけたその反骨は、どこかで一乗寺の里人が培ってきた気風と一脈通じるものがある。

この丈山の他に、隠栖の地にこの里を選んだ人士でいまひとり忘れてならぬのは、安政の大獄で失脚した反幕派の領袖三条実万である。実万が落ち着いた先は、一乗寺堀の内。の渡辺姓を名乗る民家だった。堀の内というのは、詩仙堂の西北の一郭、往時は堀がめぐらされ、そこに渡辺氏の皆があつたいわば里の中心部である。

その反骨に温かい共感をいだきながらもどちらかといえば不即不離で丈山を見守つたこの里は、幕府の弾圧で禁裏を追われた実万の場合には、むしろこの公士を敬慕し、匿おうという気概で迎えたのだと思われる。

芭蕉隠密説というのがあるように、丈山も渡辺一族の動静を探る徳川の問者ではなかったかという説がある。そうでないことは里人が肌で感じて知っていたろうが、詩仙堂のすぐ北にある円光寺は明らかに監視寺だった。家康は南禅寺から崇伝に次いで元信を重用して、伏見城内で学問所をひらき文教の普及に功績のあつたその元信が円光寺の開山で

ある。寛文七年（一六六七）、幕府は火災に遇つた円光寺に代替地としてこの山麓を与え、山内に堂宇のほか東照宮を建立させた。家康と元信とのかつての関係を推し量れば、一般の目に東照宮の造営は不自然ではない。しかし、その真の狙いは、参詣にことよせて渡辺氏の動静をつねに観察することにあつた。

江戸幕府の実権がいよいよ定まると、昔からこぞつて天台宗であつたこの里から浄土への集団転宗が出たことが、監視下に置かれた里の苦衷を物語っている。浄土は徳川家の宗旨であるから、転宗は幕府の心証を慮つての手段だったといえるだろう。

丈山が詩仙堂に住まつた頃、一乗寺には渡辺姓を名乗る家が三十六軒あつたといわれている。分家が分家を生んで、今日のこの里の渡辺家は百軒を下らない。ところで、それらあまたの渡辺家で語り継がれてきている出来事に、上田秋成が春雨物語のなかに「死首のえがお」という短篇に仕立てた源太騒動がある。

明和四年（一七六七）というから、この里もようやく泰平に親しんだ頃のことだ。詩仙堂の南に「南の渡辺」とよばれる本家格の家があつて、そこに源太とつやの兄妹がいた。

一方、堀の内にも「北の渡辺」とよばれるこちらも本家格の家があり、右内という嗣子があつた。右内とつやは幼少からの許嫁で慕いあう仲であつたが、つやが十七歳という婚期を迎えたこの年、南の渡辺家はすでに兄妹の父が他界し禁裏出入りの職をも失つて逼塞の体だったらしい。そこへ、北の渡辺家では他家から右内に妻を娶るという噂がとつぜん源太の耳にはいつた。源太と右内のいづれかが禁裏の武芸指南職をひきつぐ話が過去に生じたとき、源太はその榮職を右内に譲っていた。だから、右内の父が言う、いまや両家は格式に差がある、という約束破棄の理由を、源太は胆に据えかねた。

ある日、白無垢の婚礼衣裳に身を包んだつやが、源太に手をとられて北の渡辺家の式台の前に立つた。何事か、と右内の家族たちが玄関に現われた利那、源太の腰の太刀が一閃し、つやの首が敷台上に転がった。

事件のあと、一乗寺の里では幾体かの慈母観音が彫られ、縁故のある者がそれぞれに念持仏としてつやの菩提を弔つたという。

この事件でもっとも考えさせられる点は、源太が無罪放免となり、咎は右内とその父にかかつて所払いとなつたことである。渡辺一

統の首長を放逐することは、事件そのものの裁量とは別次元で奉行所の得策としたところかもわからない。

わたしはあるとき、両家の筋をひく家この里に捜したことがある。

北の渡辺家は、玄関の式台に面して武者溜といつてよい前庭をもっていた。低い築地越しに奥庭から見事な黒松が枝を張りだしてきていて、式台の前に立つには枝先のひとつを潜らなければならぬ。わたしは式台にむかつて瞑目してから奥の庭を見せてもらった。おそらく源太騒動を見たにちがいない一本の古松をこれも樹齡を疑た何本かの木斛が遠巻きにしている重厚な庭であった。

南の渡辺家では、苔むした庭のほぼ中央に太い木斛が一本、ほぼ直幹に立っていた。梢を詰められているが腕に力瘤をつくつたようなその雄渾な枝ぶりに見惚れていると、應對に出てくれた老女の口が綻んできた。木斛のかたわらの根株を訝ると、それは大きな五葉松が枯死したのだという。わたしは老女に勧められるままに座敷へあがり、暗い厨子のなかに、微笑を湛えた慈母観音を仰いだ。

一乗寺は石垣と土塀がめだつ里である。今

日では都市化の波が押し寄せて軽薄な構えの家が交じりはじめてきているが、なお往時の里の趣きはそこはかたなく漂っているといえるだろう。

東の山からその里へ降りると、金福寺から詩仙堂へ道は古い民家の土塀のあいだを縫い、詩仙堂からは、円光寺と西円寺の門前を経て閑静な道が曼殊院へと通じている。

松本章男著 「京の裏道 2 洛北」

(平凡社カラー新書 23頁、26頁、28頁)

33頁)

著者の御好意により許諾をえて引用す。

かぞえ歌

- 一、広い修学院の面積は 一千五百五十町
- 二、ふりをかざらぬ村人の 家は五百で三千人
- 三、見れば小鮎もさばしりて 清き流れは高野川
- 四、世に知られたる比叡山 高さは二千二百尺
- 五、いととうとき離宮にて 音羽の滝も人と知る
- 六、武者と文者の名で知らる 丈山遺跡は詩仙堂
- 七、名高きお寺は曼殊院 社は赤山八幡宮
- 八、安くこの世を渡るには 共同一が第一よ
- 九、心をこめて勤めよや 正しく早くまじめにて
- 十、徳と知恵とをよく磨き 村の繁成進めよや

この歌は、修学院小学校の建った大正五年に作られたものです。作者は名倉宗一先生で、当時四年生であった菅原キヌさんが憶えておられるのを書き留めました。その頃の人口や高野川の様子を知る上で興味ある歌だと思えます。



九月十九日（学年委員会企画）

“土よう遊ぼう会でお母さんも一緒になってかかし作りを楽しみました。アイディアいっぱいユニークな作品がぞくぞく出来上りそれぞれ近くの“たんぼ”に立てられました。”



あとがき

第12号を皆様にお届けします。作成に当り御協力下さった先生方地域の皆様にお礼を申し上げます。初めての会報作りで、色々手順が後先になりましたが、委員一同不慣れながらも一生懸命取り組んで出来上った会報です。最後までお読みいただければ、幸いと存じます。これからも学校、育友会の活動と会員相互の意見交流を報道する機関紙ですので、皆様の参考になる御意見、御協力を仰いでがんばりたいと思っております。よろしくお願い致します。

